

この夏は、いつもにもまして猛暑が続いているにも関わらず、報道からは「異常気象」という表現がめったに聞かれなくなっています。いよいよ、常態のなかの気温上昇というサイクルに入ったということでしょう。

“水の惑星に生きる”をテーマに、海の日に合わせて開催された「環太平洋地域の環境保護とエネルギー政策国際シンポジウム会議」に出席するため、神奈川県藤沢市にある慶應大学・環境情報学部に行ってきました。

参加することになったきっかけは、数年前、主に環境問題を扱った The Wonders of Science という本で、If the Oceans Should Die —カタストロフィーの最終段階(its terminal phase)— を読んだことです。そこには、「このまま海水温の上昇と酸性化が続くと、海の生態系が崩れ大量死した海洋生物の脂が海面を覆い始める。そして、その脂は海水の蒸発を妨げ、海水面が上昇。海辺の町は海に沈み人々が山へ山へと移動し始め、やがて陸上の食物生態系も崩壊していく。」という悲観的な仮説が描かれていました。

この仮説を実証するかのように、昨年以來、魚の大量死のニュースが、アメリカ・メキシコ・シンガポール・中国などから相次いで報告されるようになりました。科学の歴史の中で「海」がようやく理解され始めた現代にあって、気が付けば、人類は自らが推し進めてきた自然環境の破壊行為から海を救うために、the terminal phase への対応を待たなしに迫られる時が来ているように思えます。

このことが気になっていて、どうしても、このシンポジウムに参加したいと思い、大学関係者をお願いし参加の機会をいただきました。

会議初日、環境問題研究のトップランナーであるハワイ大学が基調講演し、世界で最も進んだ温室効果ガス排出規制の施策を紹介しました。

最終日には、カリフォルニア州立大学が長野県飯田市の「21 世紀いいだ環境プラン」に言及し、“Shinshu”という表現で長野県の環境施策への期待を述べたことに驚きました。

内容は、「ハワイ及び環太平洋地域は、低炭素化と再生可能エネルギーの未来に関する、世界的なモデル地域となるように貢献していかなければならない。とりわけ信州は、自然環境と日照時間が豊富であり、クリーンエネルギー施策のイニシアティブを期待される地域である。」というものです。

アジアで最も恵まれた自然環境を整えた地域のひとつとして、長野県の環境問題への貢献が、世界から注目されていることを改めて認識しました。

折しも、学びの改革を目指す長野県にあって、篠ノ井高校には、進学校の強みを生かした探究

的学びの開発が期待されています。現在、「自然環境を整えた地域というアドバンテージを生かした探究的学びのプログラム」を開発できないものか、信州大学・繊維学部と相談しているところです。

いよいよ、夏休みを迎えます。政治を中心に、高い低い欲求が不調和のまま入り乱れているように見える日本社会で、皆さんを導くのは、学問で得た叡智と、クラブ活動等で得た他者と協働する力だと思います。主体的に文武両道を求め、逞しく成長してほしい。

最後に3年生諸君。大学受験といっても何も恐れることはありません。ここからは、物質的要求やつまらぬ理屈とはかけ離れた、精神的な勉強を深めてほしい。学問に真正面から向き合うことで、複雑怪奇と思われた世界の方から、あなただけが持つことのできる人生の目標や、生き甲斐がやって来るものだと思います。“高校生最後の夏”に鍛えてほしい。

お互いに力を合わせて、助け合いながら、一つひとつ乗り越えて行こうではないか。